

## ★先輩の経験紹介

出願を思い立ってから受験、入学、修了までのプロセス一例

働きながらの大学院進学について悩んでいる方へ向けて、先輩が実体験を振り返ってくれました！

日本国内での国際協力実務に従事する舩岡 真穂実さん（フルタイム職、子2人の母親）の場合。コロナ禍を挟み3年での修了

年月	主要イベント	内容・特記事項（仕事や育児とのやりくりにかかわる情報も記載）
<b>2017年度</b>		
12	・大学院説明会に参加	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>スタート</b>：支援する側（国外）と支援される側（国内）それぞれの立場で感じる「もやもや感」と課題意識</li> <li>・<b>説明会での出会い</b>：①「インクルーシブな開発」「マイノリティの包摂」といった概念や対象に寄り添うアプローチ、②配布資料「開発福祉の地平」での「開発課題を、主体となるミクロナン々と地域社会のイニシアティブを中心に」「制度から抜け落ちる人々をいかに支えるかを国内外の課題を貫いて考える」といった考え方</li> <li>・<b>応募理由</b>：私自身が当事者である子育て支援を事例に、多様性を包摂した開発の分析枠組みや実践について発展。支援の両立場が分かる強み、開発経験と当事者経験を活かし、子育て支援の問題の所在を明らかにし、課題解決を試みる。</li> </ul>
1	・研究計画書の作成（応募書類）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>出願時のテーマ</b>「福祉開発における多様性を包摂するアプローチ」</li> <li>・<b>出願時に想定していたアプローチ</b>：開発福祉の概念から拾った要素のまま（副題） ⇒自分自身が「コミュニティ」に引っ掛かりがある⇒「コミュニティ・アプローチ」を調べる（⇒結局、用いず）</li> </ul>
2		
3		
<b>2018年度</b>		
4	入学 ・講義科目スタート。	
5	・リサーチゼミ（福祉開発）での指導（※） ※集中講義中の開催。 掲示板・オンラインでのゼミ指導は通年。	<ul style="list-style-type: none"> <li>【<b>科目履修について</b>】</li> <li>・<b>履修の工夫</b>：2年目は修論執筆に集中できるように1年目でテキスト科目（講義系の科目）履修は終える。スクーリング必須2科目のうち1科目は1年目に取得。</li> <li>・<b>修論研究との兼ね合い</b>：講義科目の議論に参加・記録し、研究テーマを深めるツールとして活用（自身の思索の深化、指導教官共有・意見交換、部分ドラフトの進捗）</li> </ul>
6		
7		
8		
9		
10	・日本スクーリング ・論文テーマ（仮）の提出	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>ゼミ指導（研究テーマ）</b>：共感する思想・概念や問題意識どまりで、何をどのように明らかにしていけば良いのかわからず。ただし「地域」という言葉への違和感から「場」という言葉をあて、またアプローチ策には当事者の自由や自立の確保の重要性といった視点をあてる。</li> <li>・<b>テキスト科目やスクーリングの活用</b>：研究テーマと通じる事例議論は疑問点も含めて修論研究の材料に。科目レポートも研究テーマに関連つけた内容で作成（執筆時の参照メモに）。スクーリングを契機に問題意識が似通る同級生と立ち上げたLINEグループが修了までの支えに。</li> <li>・<b>研究計画書</b>：最初の修論の設計図。内容は未だ不明瞭ながら章構成の概観から書くべき修論構造を把握。暫定的な作成スケジュールも。</li> </ul>
11		
12		
1		
2	・論文計画書の作成・提出	
3		
<b>2019年度</b>		
4		
5	・先行文献研究（GW） ・リサーチゼミ（福祉開発ゼミ）での指導。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>先行文献研究（5月GW）</b>：先行文献から研究 이슈の扱いを確認。「子ども・子育て支援」の曖昧さ、特に「地域で子育て」などの概念や担い手の定義不在のまま受け皿とする議論など、先行研究に確認できる不足点や課題が自身の研究の焦点に浮かびあがる⇒<b>5月のゼミ</b>で報告⇒<b>しかし構成にいきづまり感（問題意識＋限られた文献調査だとトートロジック的）</b>。</li> <li>・<b>テキスト科目（M2前期）</b>：大学院掲示板とつながるために2年目もテキスト科目1科目は履修。そこで、センのケイバビリティ論への関心が深まり、センのケイバビリティ論を分析の視点に用いて科目レポートを作成するなど、自身の修論での分析の枠組みとする概念を得るきっかけに。</li> <li>・<b>ムラのミライの子育て支援事例を知る（7-8月）</b>：指導教官がムラのミライのメルマガで見かけた子育て支援事例を共有⇒団体の報告書を読んでこれだ！と感じ、掲示板で事例として取り上げたいことを相談（ただこのときは問題意識の導入材料として使う程度の想定）</li> <li>・<b>インドスクーリングと東京YWCAの調査事例浮上（8月夏休）</b>：スクーリングの先生からケイバビリティの概念、地域やつながりを考えるにあたっての視点、参考文献など紹介いただき、修論内容の前進機会に。東京YWCAが調査対象事例に浮上。</li> </ul>
6		
7	・ムラのミライ出合い	
8	・インド・スクーリング ・東京YWCAへの気づき	
9	・ムラのミライ、東京YWCAへの面談申込	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>中間報告（9月ゼミ～11月）</b>：地域における子育ての実態を上流の政策・制度面から地域レベルまで抑えて分析、特に当然視されるが故に果たしている存在、見えなくなっている母親/女性にスポットをあてて、といった大きなテーマを整理。支援アプローチの方向性、第三者にも伝わるような根拠や妥当性の検証構造など修論計画書のベースを整理。</li> </ul>
10	・東京YWCAインタビュー（NGO子育て支援活動者）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>インタビュー調査（2019/2020年末年始休暇）</b>：見出したフィールド調査関係者に、年始年末休暇の機会を使って<b>突撃インタビュー</b>を敢行。自分自身が持つ問題意識や疑問、あるべきではないかと思う方向と同じ意見・意識が確認でき、自分が突き進んでも良いと思う方向をつかむことができた（文献研究だけで論を積み重ねることで突き当たる壁を突破）。</li> </ul>
11	・修士論文中間報告 ・ムラのミライ面談実施	
12	・a littleインタビュー（代表、運営スタッフ、会員）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>ドラフト執筆（2019/2020年末年始休暇）</b>：2年修了は厳しい状態であるものの修論一次提出メ切り日まで頑張ろうと執筆にトライ。分析の枠組みがなく先行研究のまとめ情報を確認⇒執筆が進んだ際の参照材料として役立つ。</li> </ul>
1	・手持材料での執筆挑戦 ・東京YWCAインタビュー（公立・私立保育園等での保育の長年の経験者）	
2		
3	(修論作業休止)	・コロナ感染拡大、仕事対応の増大、子どもの3月からの休校対応

2020年度		
4		
5	・5月ゼミ	・4月新年度は家庭での学習指導を前提とした学校休校、仕事も膨大な追加業務にオンライン対応も不十分
6	(GWのぞいては修論作業休止)	・研究計画書改定(5月連休)：インタビュー調査をもとに構成を再整理、「書き進められる」という感覚。
7	・執筆開始(週末のみ) ・8/15オンラインゼミ	・改定した研究計画書に基づき執筆開始(2020年7月~8月中旬)：子どもが毎日学校に行き始め、何とか執筆を進めねばと決心。指導教官・ゼミ生フィードバックをいただきつつ、現状まとめのような原稿から「修論研究」「構造分析」に発展できた時期。科目履修やゼミ指導、執筆トライアルなどで書き散らしていたメモも修論の章立てに当てはめて再構成することで素材として生きる(ゼロからの執筆より執筆速度が上がる)。 -7/12の週末：第1章(序章)と第2章(日本の文献調査)素案 -7/27週末：第3章(西欧諸国の文献調査) -8/2週末：第4章部分(フィールド調査/インタビュー内容のまとめ)
8		
9	(修論作業休止)	・作業中断期(担当業務追加)(8月中旬~10月初旬)
10	・オンラインゼミ(複数回)	・オンラインゼミきっかけに週末作業再開。日本スクーリング前後複数回開催あり、ゼミ開催の週末ごとに試行的に進めたセンのケイパビリティ論を使っ
11	・執筆再開(週末のみ) ・分析の枠組み整理	てのインタビュー分析や構造分析を共有。インタビューは2020年度の本調査を前提にしていたが、コロナ禍での工夫として、前年の「突撃インタビュー」のノートを再整理し、既存の報告書をベースにそれを補足する形で、構成を再編した。 ・ゼミ議論を通じて理解が十分ではなかった分析の枠組みが掴め、同章(新2章)の素案を執筆。
12	・一次提出原稿の執筆	・1/4を一次提出日と考えつつも、12/20(日)提出原稿から本提出に向けたコメントをいただき、その後は本提出に向けて作業へ ・協力団体へのインタビュー使用内容の共有、事実確認等
年始年末	・あてられる時間は執筆に	
1	・1/20最終提出 ※郵送、当日消印	・主に年始年末休暇にて、一次提出コメントもとに改定しつつ、順次各章執筆の完成作業を開始。 ・インタビュー団体との使用するインタビュー内容のオンラインやメール確認、追加ヒアリング等も並行実施。 ・時間が足りないため、最終ドラフト確認も章ごとに指導教官に対応いただく(執筆開始が遅れた2章は1/19、6章は1/20確認)。並行して修了同級生の「てにをは」チェックが大きな助けになった。 ・提出日丸一日は、提出原稿の最終確認や印刷・発送作業にかかるとの認識で。
2	・1/31レジュメ提出メ切 ・2/6口頭試問	・週末ベースでは本論提出から口頭試問資料提出まで1回の週末。本文3ページでのレジュメを作成 ・口頭試問もレジュメで対応(powerpoint使用なし(※)) ※殆どの人がパワーポイント利用。時間管理上は使用が便利でもあるので指導教員と事前に相談しておく。
3		
4	・4/17修論報告(自主企画)	・協力者の方への修論報告会。自身の修論研究の意義を確認できる貴重な機会。